

前田惠學博士を偲ぶ

藤 田 宏 達

二〇一〇（平成二二）年一〇月三十一日、前田惠學博士が満八十三歳をもってついに逝去された。その旬日前に三枝充惠博士逝去の知らせを受け、そのことで電話で話をしたばかりだったので、突然の悲報に愕然とした。無常迅速とはいえ、大学同期の畏友二人を相次いで失い、哀惜の念ひとしおである。

前田博士の生涯と業績については、近時の『前田惠學集』全七卷・別卷二（山喜房佛書林、二〇〇三―二〇〇七）を繙くと、ほぼすべてが尽くされている。各巻のタイトルは、第一卷「積尊をいかに観るか」、第二卷「仏教とは何か、仏教学いかにあるべきか」、第三卷「現代上座仏教の世界（一）」、第四卷「現代上座仏教の世界（二）」、第五卷「文学として表現された仏教」、第六卷「核の時代における平和と共生ほか」、第七卷「命終る時ほか」、別卷一「原始佛教聖典の成立史研究」、別卷二「現代スリランカの上座

仏教」である。

かねて博士は、文は人なり、学問も人なりとの思いから、この著作集についても一般のそれとは多少違うことを第一巻の「まえがき」で記しているが、確かに仏教学者の著作集としてはユニークである（以下『前田集』と略す）。おそらく普通は学術上の主著が中心になると思うが、それは別巻一に配されており、この主著に関する覚書と著者以外の手になる審査報告・書評のみが第一巻に収められている。『前田集』が完結した後には、筆者は書評で、こうした点を含めて若干の私見を述べたが（『印度哲学仏教学』第二十四号、二〇〇九）、翌一〇年春になって博士から返書があり、もはや手を加える気力・体力もないとのことであった。その頃には、すでに病状（膵臓癌）が進行しており、暗然たる気持で電話をしたことが改めて思い出される。第四巻には、詳細な「履歴並びに業績」の一覧が付されており、第六・

七巻の奥付には追加記事もあるので、それらを撮要して、故人を偲ぶがとしたい。

前田博士は、一九二六（大正一五）年一月二九日の生まれ（実際は二八日の生まれの由）、第八高等学校を経て、一九四七年東京大学文学部哲学科（印度哲学専修）に入学した。同期の中で仏教の学問の道を同じく歩むことになったのは、三枝博士、高崎直道博士と筆者の四人であった。卒業は前田博士のみ一年留年し、五一年大学院特別研究奨学生として進学、修了後東海同朋大学専任講師に就いたが、五六年には東大文学部助手となり、梵文学研究室に勤務した。任期満了後、六三年名古屋に本拠を移し、自坊の真宗大谷派速念寺第十五代住職を継承して、爾来、寺門の興隆発展を期すとともに、東海学園女子短期大学、名城大学、愛知学院大学それぞれの教授として活躍した。特に愛知学院大学では、文学部長、大学院文学研究科長などを歴任して重要な貢献を果たし、二〇〇二年同大学を退職し、名誉教授となった。

この間、学会活動も多方面に亘り、日本印度学仏教学会、日本宗教学会、東海印度学仏教学会の理事・評議員のほか、日本学術会議会員を二期つとめ、八六年にはパリ学仏教

文化学会を創設して初代会長となり、逝去までの二十四年間この学会の発展に尽力した。一方、受賞・榮譽についても多彩で、日本印度学仏教学会や日本宗教学会の学会賞をはじめ、六六年には主著によって日本学士院恩賜賞を受賞した。九八年には「文化の向上発達に関しとくに顕著な功績」により文化功労者として顕彰され、翌年には勲二等瑞宝章の叙勲を受けた。このほか近年では仏教伝道功労賞やスリランカ国立フナ大学の名誉文学博士など、数多くの受賞・榮譽に輝いている。

次に、業績について窺うと、まず『前田集』別巻一に復刊された主著『原始佛教聖典の成立史研究』（山喜房佛書林、一九六四）は東大提出の学位論文を基礎としたものである。内容的には、仏陀の用いた言語とパリ語の故郷を尋ねて、原始仏教の教団が東方マガダ語圏から西方パリ語圏へ発展した過程を明らかにし、その中で形成された聖典最古の形態を九分十二分教やパリヤーヤの中に探り、現在の五部四阿含の成立史を具体的に究明した画期的労作である。仏教文献学者としての成果を遺憾なく発揮したもので、半世紀近く経った今日でも、原始仏教の文献研究の基本的な参考書とされる著作である。ただ、この分野に関しては、そ

の後新しい研究成果が続出しているので、復刊に当たってそれらについて何らかのコメントが欲しかったと思うが、もはやそれは叶わぬことになった。

この主著に続く単著としては、二冊ある。一つは講義のテキスト『仏教要説—インドから日本まで—』（山喜房佛書林、一九六八）であり、第二巻に補足して収められている。他は、大谷派安居の講録『釈尊』（東本願寺出版部、一九七〇）であり、増訂改版（山喜房佛書林、一九七二）を補修して第一巻に採録されている。第一巻は、巻頭の「釈尊をいかに観るか」という論文（一九九三）をタイトルにしているが、実質的にはこの単著が中核となっている。

単行本以外で分量の多い成果としては、パリー聖典の翻訳がある。第一巻には『マハーヴァツガ（小品）』と『ダンマパダ（法句経）』の二編（一九五九）、第五巻には『ジャータカ（本生説話）』の抜粋訳（一九五九）と『テラガーター（長老の詩）』『テリーリーガーター（長老尼の詩）』の抄訳（一九六〇）が収められている。いずれも若い時代の訳業である。このほか論考・講演・報告・エッセイなどが多数あり、それらのすべてが覚書を付して各巻に配分されている。一般向けも多く、著者以外の文辞も含まれていることから、

著作集ではなく、単に『集』と名づけたのであろう。

ところで、博士は主著の公刊後、原始聖典の新古の層を追って「原始仏教思想史」を執筆する計画を持っていたが、しかしその後計画を中止し、現代仏教の研究へと大きく転換した。これを決定的にしたのは、名古屋地域で結成されたアジア・エートス研究会に参加し、東南アジア諸国の仏教の学術調査に従事したことによるようである。『前田集』第三巻と第四巻には、現在上座仏教が行われているスリランカ・ミャンマー・タイ・カンボジア・ラオス・インド・バングラデシュ等の現地調査の記録・報告などが取り上げられており、一部はヨーロッパ仏教にも言及している。このうち、スリランカの共同研究を集大成したのが、別巻二に配されている編著『現代スリランカの上座仏教』（山喜房佛書林、一九八六）であり、これによって博士は仏教文化人類学への志向を自他ともに鮮明にするに至った。別巻の縮刷版再刊に当たって言う——「仏教学は、従来、過去の仏教の研究に終始し、研究方法も多くは文献学や歴史学の方法によっていた。しかし私は文化人類学や社会学その他現在を扱う研究方法を用いて現代仏教を加えなければ、仏教学の研究は完成しないと主張してきた」と。

こうして、博士の後半生は専ら現代仏教の研究に集中し、フィールド・ワークの対象は、東南アジアのみならず、中国や韓国の仏教にも及んだ。中国には度々旅行して各地を訪ね、その中で見聞した現代居士林の仏教と念仏信仰の実態を報告している。また日本仏教の現状についても、いわゆる葬式仏教とか水子供養の問題、終末医療、臓器移植に対する仏教の立場、あるいは真宗の戦前戦後の法座の在り方、さらには教団いかにあるべきかという問題なども取り上げている。四十年近くの住職在任中、独特な本堂・仏舎利塔等を建立して寺域を一新し、寺内にスリランカの留学僧を寄宿させたことなども、いわば自坊を対象としたフィールド・ワークの成果と見るべきであろう。

第七巻は「命終る時」という講演（一九九七）を冒頭に置き、この巻のタイトルともしているが、そこには博士の生と死に関する思いを込めた数々の文章を収めている。最後は「甦りのこと」で結ばれるが、これは親鸞の還相回向の教説に基づいた独自の己証であり、これをもって「浄土の教えの極まるところ」と説く。この巻には、原始仏教から始めて、最後に浄土真宗に辿りついた学問人生の軌跡を窺うことができる。

博士は、折々、学問上クリエイティブな仕事ができるのは六十歳までと記しているが（前記編著を出版したのが六十歳）、しかし『前田集』を完成したのは満八十歳であった。第一巻に収める「何故「原始仏教」か」は、第六巻にも重複収録されているが、往時の原始仏教の文献学的研究に戻ったかと思わせる論文である。また、第七巻では「親鸞聖人のご往生はいかがありしか」を今八十歳になってまとめることができたのは嬉しいと述懐している。この論稿は、親鸞の臨終の姿を頭北面西ではなく、五体投地して仏の来現を仰ぐ姿と見る新説であり、いささか問題は残るものの、博士が晩年浄土真宗に回帰して、クリエイティブな仕事をめざしていたことを示している。

前田博士の葬儀は、十一月五日自坊速念寺で執り行われた。宗派を超えて、また海外からも、多くの人々が参列して、博士の死を悼んだ。会葬者には第七巻に収められている『聖典 寿経』の決定版（二〇一〇年五月）という小冊子が配られ、これには「仏教―浄土の教えの極まるところ10か条」という一紙が添えられていた。浄土へ往生した博士の最後の説法と言ってよいであろう。合掌。

（二〇一一年一月三十一日）